

# 「文化」を問い直すための10冊

「文化」は、地域を耕作し、種を蒔き、栽培・収穫し、  
よりよいものにして未来に引き継ぎます。  
都市・地域における文化を問い直すために参考となる書籍を選びました。



**6 『自主独立農民という仕事』**  
——佐藤忠吉と「木次乳業」をめぐる人々——  
有用な乳酸菌を生かす「パスチャライズ製法」を  
発案した島根・木次(きすき)乳業の「ゆるやかな共  
同」を、創業者佐藤忠吉氏の語りをもとに描く。  
出雲の風土を大切に、「百姓」と名乗る氏は、自  
らが納得する農法を行う自主独立農民であるべき  
と語る。大量消費・流通により農業の工業化が進  
む今、持続可能な地域社会づくりの示唆となる書。



森まゆみ=著  
バジリコ/2007年

**1 『世界一のレストラン  
オステリア・フランチェスカーナ』**  
2016年「世界ベストレストラン50」の第1位に選  
ばれた「オステリア・フランチェスカーナ」シェフ、  
マッシモ・ボットウーラ氏の歩みを概観した本書  
には、料理人には「文化」が必要と言う氏の哲学  
が存分に語られている。歴史と郷土を学び、自ら  
の問題意識を軸に創造性を高め、客や生産者へ  
の責任を持つ——食と文化の結びつきを問う書。



池田匡克=著  
河出書房新社/2017年

**7 『関西と関東』**  
関西と関東はどこが違うのか？ 経済史の碩学  
が、風土、災害、食物、服飾、芸能、方言、気  
質といった多角的なキーワードとともに分かりや  
すい例を挙げ、関西と関東の違いを徹底比較し  
ていく。大阪生まれの著者ならではの大阪愛に  
あふれた文章ながら、両者を冷静に見つめる視  
点で東西のあり方や問題点を説く。



宮本又次=著  
文春学芸ライブラリー/2014年

**2 『企業文化 [改訂版]』**  
——ダイバーシティと文化の仕組み——  
今日、グローバル化や経営環境の変化により体  
質改善を迫られる企業が多いなか、急務となる  
組織変革やライフサイクルに応じた組織文化の  
変化、合併時の文化の衝突などに対し、豊富な  
事例研究から分析の枠組みを提示する。組織の  
リーダーやマネジャーのために書かれた一冊。



E・H・シャイン=著  
尾川丈一=監訳 松本美央=訳  
白桃書房/2016年

**8 『日本問答』**  
江戸文化研究者であり法政大学総長の田中優子  
氏と、古今東西の膨大な書物を読破する博覧強  
記の編集工学者松岡正剛氏による対談。日本文  
化の特徴を「デュアル(二重)」という言葉で捉え、  
かつてつくられた「内と外」の日本独自の価値観  
がなぜ忘れられてしまったのかを問答する。賢者  
ふたりの圧倒的な知識に溺れつつも、この問答に  
参加したくなるような知識欲が刺激される一冊。



田中優子、松岡正剛=著  
岩波新書/2017年

**3 『知識創造企業』**  
日本の大手企業を対象にケーススタディを行い、  
理論的・哲学的分析との統合から、ビジネスにお  
ける知識の重要性を説いた経営学の世界的名著。  
日本企業の成功は、西洋では重要視されない個  
人の直感や経験知、専門的知識からなる「暗黙知」  
の共有による「組織的知識創造」にあるとして、  
そのダイナミズムを促すマネジメントこそが重要で  
あると説く。



野中郁次郎、竹内弘高=著 梅本勝博=訳  
東洋経済新報社/1996年

**9 『ものの言いかた西東』**  
「ものの言いかた」は、シチュエーションで変わ  
ることはもちろん、口に出すか出さないか、まで  
広げて捉えることができる。「ものの言いかた」  
の地域差と、生み出された社会的背景を明らか  
にする作業は、著者曰く「言葉の世界から取り出  
して、広く文化という視野の中に置いてみる」こ  
と。丁寧な検証から誕生した新たな方言論。



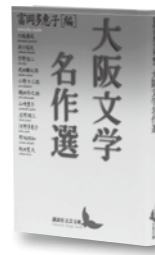
小林隆、澤村美幸=著  
岩波新書/2014年

**4 『売茶翁の生涯』**  
江戸中期の風狂の禅僧にして「煎茶道の祖」とし  
て知られる売茶翁の初の伝記。「ただにて飲むも  
勝手なり」といい、京の景勝地で自在に茶店を開  
いては煎茶を売り、仏教を広めたその非所有の精  
神は、庶民のみならず池大雅、伊藤若冲ら同時  
代の一流文人たちをも魅了した。アメリカ人研究  
者が、新たに発見された資料から、歴史に埋没し  
謎に包まれた「茶神」の生涯を明らかにする。



ノーマン・ワデル=著 樋口章信=訳  
思文閣出版/2016年

**10 『大阪文学名作選』**  
川端康成「十六歳の日記」から織田作之助「木  
の都」、山崎豊子「船場狂い」、阪田寛夫「わが  
町(抄)」まで。西鶴、近松の系譜に連なる大阪  
文学は、優等生的な生真面目さを嫌いつつ、と  
きにユーモアの陰に批評性を潜ませながら、こ  
の世の人間模様をリアルに描く。大阪生まれの  
詩人・小説家にして上方芸能への造詣も深い富  
岡多恵子を選ぶ11作。



富岡多恵子=編  
講談社文芸文庫/2011年

**5 『大阪名所むかし案内』**  
——絵とき「摂津名所図会」——  
江戸時代に大ヒットした旅行書シリーズ「摂津名  
所図会」から、大阪名所36景を読み解く。堂島  
米市などの三大市場、道頓堀の顔見世、安治川  
橋と海船、四天王寺の聖霊会、難波新地の大相  
撲……名所とともに描かれるのは、歴史や地理、  
風俗のみならず人々の暮らしぶりだ。今の大阪に  
つながる生活文化を知るための絶好の一冊。



本渡章=著  
創元社/2006年